

学生の自律性を高める協同学習  
— 大学における「言語と文化」の授業実践 —  
Enhancing Student Autonomy through Cooperative Learning  
—For ‘Language and Culture’ Class in College—

吉野 康子  
Yoshino Yasuko

**Abstract**

The aim of this paper is to investigate the image of cooperative learning in college classrooms on student autonomy. English language teaching (ELT) in Japanese colleges seems to be in the midst of a paradigm shift from teacher-centered to learner-centered.

In the past, memorization had been a major component in the teacher-centered classrooms. From a learner-centered perspective, learning is not a passive acceptance of information. On the other hand, learning is an active process with responsibility for learning placed on and within the learner. In other words, student-initiated critical thinking must take place for learning to occur.

This study involved a total of 34 participants-12 groups of 2 or 3. Participants were part of an intact ‘language and culture’ class in a private university in Tokyo. These participants chose a topic concerning English and Japanese language and culture. Participants were required to work autonomously and cooperatively with group members to research and create a final presentation which was delivered to the entire class.

Prior to the commencement of this study and at the conclusion of the study (pre and post), participants completed a two-part (Part I dichotomous, Part II open-ended) questionnaire. The results suggest that learners having the responsibility for their own learning and having to engage in critical thinking has a positive influence on their ability to work cooperatively with group members and autonomously from teacher instruction.

## はじめに

「学びの共同体」をめざす学校改革が急速に広がっている（江利川2009, 金子2008, 根岸2010）。日本の大学教育においても、「教え中心」から「学び中心」へのパラダイム・シフトが進行しているとも言われている。大学でも、協同学習を取り入れた授業改革が成果を上げつつある。「英語を使うこと」の習熟を中心とした授業ももちろん大切だが、学生が主体的に取り組み、「言語・文化」に関して考える授業も必要ではないだろうか。言語観について授業で触れたのは、以下の意見から意義があると考えたからである。ことばの教育・学習にはメタ言語能力も必要である。メタ言語能力とは、ことばに対する知識および判断力である（森住2004）。英語教員の本来の役割は、英語という特定の言語の愛好者や支持者を育てるというよりも、おそらく、英語やその文化について、学習者に新鮮な関心と出来るだけ偏りのない理解をもたせることではないのか（大谷2007）。以上の意見をふまえて、2010年度の「言語と文化」の授業において、グループでの学び合い、発表主体の「考える」授業実践を報告し、その意義と問題点を考えたい。

### 1. 本授業の概要

- (1) 対象：2010年度に「言語と文化」の授業を履修した私立大学文学部の学生 34名
- (2) テキスト：Paul Stapleton (2008) “How Culture Affects Communication (金星堂)
- (3) テーマ：以下の a～o の15のテーマから、興味のあるものを学生が選択する。
  - a) Age, Status, and Family：家族を表すことばとその国の文化
  - b) Politeness：英米人の礼儀正しさの感覚とは
  - c) Feedback：「あいづち」は日本人のストラテジー
  - d) Rituals：なぜ、英語に「いただきます」はないのか
  - e) Titles：「肩書き」からわかることばと文化の違い
  - f) Modesty：「謙遜」は英米でも通じる美德である
  - g) Heart-to-Heart Communication：主語と目的語が無くても通じる日本の不思議
  - h) Face-to-Face Communication：コミュニケーションは表情で事足りる
  - i) Proverbs：ことわざに見る、日本語と英語の共通点
  - j) Idioms：英熟語や慣用表現の学び方
  - k) Comparing：比喩表現はことばのスパイス

- l) Politically Correct Language：知っていても、使ってはいけないことば
- m) Pronunciation：ネイティブスピーカーの発音に戸惑わないために
- n) Agreeing, Disagreeing, or Simply Not Knowing：Yes/No だけでは言い表せない表現
- o) Reflections of Language and Culture：真の国際人になるために

#### (4) 協同学習

- i レジュメ・文献レポート・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料1  
グループで、テーマに関するレジュメ作成と、参考文献を集め、テーマを深める文献レポート作成を行った。学生が主体的に役割を分担し、学習することをめざした。発表の際、必ず全員にレジュメを配布するため、誰が見ても理解しやすいことを留意した。仲間による評価表も配布し、最後に比較・分析した。レジュメを作る時の約束ごととして、次の5点を確認し、発表前にオフィスアワー等で相談にのり、指導した。
  - a. 各ユニットの Key words, Key sentences を英語と日本語の両方で書く。
  - b. 本文の内容の summary を英語と日本語の両方で書く。
  - c. レジュメの他にテーマを深めた資料をつけ、出典を明らかにする。
  - d. 考察の項目には、必ず、個人の意見を書く。
  - e. ネット以外の参考文献を読み、明記する。
  - f. グループ内で分担し、テーマを深めた内容と考察を文献レポートとして提出する。

#### ii 発表

まず、グループで興味のあるテーマを選び、都合のいい発表日を調整した。次に、発表の方法、話し方に関して、事前指導を行った。発表に関しては以下の4点を確認し、90分に2グループずつ発表を行った。

- a. 発表者同志で協力して準備をし、レジュメを早めに提出する。
- b. 発表テーマのユニットは全員が予習し、質問、議論ができる準備をしてくる。
- c. 各発表時間は20分、質疑応答、議論15分、内容確認、まとめ10分で行う。
- d. 各発表後に、各自、評価用紙に記入する・・・・・・・・・・資料2

すべての発表が終わった時点で、「プレゼンテーションの評価とまとめ」と称した課題を出した。

その内容は、どのグループの発表のどの点が優れていたか、上位の発表から3つ挙げ、記述するものである。学生たちの評価は適切で、3位までに入ったグループは、ほぼ一致していた。また、発表に関して、以下のように優れた面を具体的に表現してくれた。1位から3位までのグループには、筆者のコメントも加えて、授業中に表彰した。

学生のコメント例（原文のまま）

- ① 「相槌は日本人のストラテジー」という副題に対して，反対意見を述べ，批判的な視点から見ていて，かつ，国によって相槌の方法が異なるという点から論理的に考察できていた。
- ② 口頭説明のところで，「注目したいところは…」など，重要なポイントを言ってくれて，発表にめりはりがあり，聞きやすく理解しやすかった。「英語の成り立ち」に，時代背景，当時の出来事なども含まれていて，とても興味深かった。
- ③ 主語と目的語をはぶく日本語と，主語と目的語をちゃんと入れる英語の，それぞれの成立の時代背景が面白かった。そして，主語と目的語を省くか入れるかで変わる文の違い（長さ，細かさなど）を，源氏物語の文を資料にして説明していた点が，工夫を凝らして良かったです。

## （５）言語観

言語観は人によって異なるからこそ扱うべきなのである。教育の究極は，異なる価値観を確認し合うことである（2006）。に基づいて，発表に入る前の授業において，予備知識の構築として，次の7項目の説明を行った。言語と文化に関して，多角的にとらえ，深めてほしいからである。

- ① ことばと人間
  - ② ことばの3つの機能
  - ③ サピア=ウオーフの仮説
  - ④ 「同じ」現象の切り取り方が異なる
  - ⑤ 「翻訳は裏切り」である
  - ⑥ 語の形成過程における共通性
  - ⑦ 日英発想法の比較
- i 2 択のアンケート結果：以下の判断に対して Yes ですか，No ですか。
- （左側：授業前34名中 Yes の人数，右側：授業後34名中 Yes の人数）
- a. ある国や地域に行ったら，挨拶ぐらいいはその国や地域のことばを使う。(34:34)
  - b. 国際理解の原点は互いにことばを学び合うことである。(21:18)
  - c. 少数民族や先住民族のことばは滅亡しても仕方がない。(10:10)
  - d. ことばの学習は役に立たなければ意味がない。(14:10)
  - e. ことばの教育はスキルの習熟に専念すればよい。(3:1)
  - f. 英語が話せるということは「国際人」である。(14:10)

- g. 英語は大言語であり、最も便利なので、英語を学ぶのは当然である。(25:20)
- h. 日本人式英語を堂々と推し進めるべきである。(6:3)
- i. Queen's English は正当で美しい。(16:11)
- j. 外国人が法廷に立つようなことがあれば、その母語使用を保証すべきである。(28:33)

## ii 記述式のアンケート結果

言語観に関して、考えが変化したこと、気づいたこと、考えたことは何ですか。質問項目の a～j のなかで、複数の記述があった項目に関して、学生の記述のまま下記に載せる。

f. 英語が話せるということは「国際人」である。(9名の意見)

- ① 私は授業を受けて、皆の発表を聞いて、その国の言語が話せるからその国のことを理解している、または理解できるとは思わなくなった。確かに理解の原点は言語理解であると思う。しかし、その国で生きてきた人には根付く文化やアイデンティティ、価値観があり、それを理解することは容易ではないし、言葉がわかるから理解できるという程度のものではない。難しいことだが、それらを理解しようと努力する人こそ、真の国際人だと思うようになった。
- ② 英語を話せるということは、現代では大きな強みであり、有用なスキルであるが、いくら言葉を自在に使えても、他の言語を話す人を理解しようという姿勢がなければ、本当の意味での国際人ではないのではないかと考えるようになった。
- ③ 英語を話せるということは「国際人」であると考えていたが、話せるだけでなく、文化や価値観が分からないならば、そうは言えないという考えに変わった。
- ④ 英語が話せれば国際的に通用する人になれると思っていたが、ある程度他国の背景や文化まで理解していなければ、真の国際人にはなれないのではないかと考えるようになった。
- ⑤ 私が考える「国際人」とは、あらゆる言語を話せるのではなく、どんなに生活習慣や文化が異なる中でも、上手に相手に意思表示が出来る人物であると考えている。
- ⑥ 英語を話せるというだけでは、やはり国際人とは言えないと再確認した。授業

を通じて、様々な文化の違い、言葉の違い、そして習慣の違いなどを学び、英語をただ話すという事だけでは「国際人」とは言えないし、本当に「国際人」になるためには、その国の文化や歴史なども知るべきである。

- ⑦ 英語が話せるというだけでは「国際人」ではないと私は考える。以前のアンケートでも同じ意見だったが、授業を受けて、その考えはさらに強くなった。みなさんの発表を聞いて、文化や生活様式を知らない、いくら言葉が通じて心は通じないということがわかったからだ。
- ⑧ 英語が話せる「国際人」という考えは、文化を理解していないので、真の「国際人」とは言えないと思う。
- ⑨ 言語習得＝異文化理解でない事がわかった。国際人とは、相手を理解しようとする努力を忘れず、相手の事を分かったつもりにならない人である。英語でさまざまな文化圏の人々と話ができるのは素晴らしいことだが、それで満足してはいけないと思う。

d. ことばの学習は役に立たなければ意味がない。(4名の意見)

- ① 前は Yes にしたような気がします。けれど、今は No です。たとえ、日本を遠く離れていて、生涯行かないような国の言葉であったとしても、それを学ぶ意義は大いにあります。言語にはその国の文化が色濃く表れるからです。言語を学ぶことで実際に行けなくても、外国の文化を少しでも理解できると思います。
- ② ことばは話せるようになったとしても、そのことばを話す国の文化を学ばなければ、本当の意味でのコミュニケーションはとれず、役にも立たないと気が付いた。
- ③ 役にたつというのは、例えば speaking や listening などのスキルとして身に付くことだと考えていたが、今はそういった部分の役に立つだけでなく、異文化理解に触れることがその人の人生や価値観で、結果的に役に立つという意味もあるなと思う。また、ことばの学習というのは、外国語の学習だという先入観をもってしたが、これは母語の学習も含まれるのではないかと思う。
- ④ 役にたてばもちろん良いと思いますが、ことばを学ぶことで文化を学ぶことができるので、No と答えました。イヌイットのことばを学んでも、日常生活で役に立つ日が来るとは思いませんが、サピア＝ウオーフの仮説のように、「雪」に関

することばが多いということを学べば、イヌイットの人々は「雪」が生活の中で大きな存在価値があるのではないかと文化も学べると思います。

b. 国際理解の原点は互いにことばを学び合うことである。(3名)

- ① 私は今まで、ことばを学ぶのが一番大切だと思っていました。けれど、授業で色々なテーマを聞いてから、もっと大切なのは、その文化を学ぶことだと思いました。例えば、私はRitualsを発表しましたが、日本語で「お疲れ様」だったら、英語では直訳したらおかしいし、あえて言う必要はないのだと知りました。ことばにばかり依拠してしまうと、何が本当なのか見失ってしまいます。その国の文化を学ぶことからが第一歩であり、そうすれば、ことばもついてくるのだと思います。もっと相手がどういった環境で育ち、どんな文化を身につけているのかを考えることが、互いを知り、思い合える関係を育てる気がしました。
- ② 授業前は、ことばがなくてはコミュニケーションがとれず、何も出来ないと考え、Yesにしていたが、異文化のものの考え方を学んで、国際理解の原点はまず相手の国の文化や背景やものの考え方を十分に理解し、相手の立場を尊重しながらコミュニケーションをとることだと気づいた。
- ③ 互いにことばを学び合うことも重要だが、私は国際理解の原点は、まず互いがどのような文化の中で生きているのか知ることであると考えた。そしてそのためには、まず自分の国をよく理解することも重要であると感じた。自国の文化を知らないで、相手に伝えることはまず不可能だ。

## 2. 考察

### (1) 発表準備・レジュメ作成

授業中には、十分な協同学習の時間がもてないため、学生が授業外で、相談するのにかなり苦労したようで、まとめ役の学生はかなり負担を感じていた。留意したことは、自信をもたせ、途中であきらめないように、励ますことであった。各グループがテーマを選んだあと、どのように参考文献や資料を集め、深めていくかなど、オフィスアワーをできる限り多く持ち、またメールのやりとりなどで、助言した。初めはKey sentencesがずれていたり、Summaryが抜けていたものもあったが、工夫し改良していった。なかには、何度もレジュメを作り直し、以前のものとは比べて、満足感を表明した学生もいて、非常にいい体験になったようである。作り直したなかでも、特に難しかったのは、「考察」である。単なる感想にならないよう、共に考えて、意見

交換を重ねた。考える力を養成するには、仲間の意見を理解し、批判的に考えること、そして自分の考えを伝える訓練の必要性を強く感じた。

## (2) 発表

必ず全員が発表することを約束し、自分がテーマを深めて研究した部分と考察は、自分の言葉で、聴衆の心に響くように語ることをめざした。発表にあたっては、“Do’s & Don’t’s for Paper Presentation”と題して、早口にならない、1つの発話を長くしないなど、発表の仕方や態度についての助言を20項目ほど指導した。仲間の発表のたびに、良い点・改善点を振り返ることが、良い影響を及ぼした。聴衆がレジメや資料のどこを見るのか、はっきり言及せずわかりにくいことが多かったが、改善された。最初の発表は、他の学生の意識や意欲に影響するので、できるだけ時間をかけて指導し、フィードバックも多くした。発表ごとに、学生それぞれが評価用紙に記入したが、仲間の努力した発表を励ます雰囲気があり、それに刺激を受けて、よりより発表となっていた。なかでも、最初の挨拶からすべて文字化し、口頭原稿で練習を重ねた学生の発表は、良いモデルとなり、今後も推奨したい。クラス全員の前で発表し、質問や意見に対応する経験は、今後の人生でも大きな力になると思う。

## (3) 言語観

冒頭にも述べたが、「英語を使うこと」の習熟ももちろん大切だが、英語や文化について考え、知識や判断力を育てることは非常に大切であると考え。「言語に優劣はないこと」、「違いを知り、認め合うこと」が筆者の伝えたいメッセージであったが、アンケートの結果から、この授業で、言語や文化に関して、学生たちも考察したことがわかる。一番記述の多かった「英語が話せるということは<国際人>である」という項目では、文化を理解する大切さを考えたという記述が多かった。授業前と授業後では、Yesと答えた学生が4名減った結果からも、筆者の思いが伝わったと考える。「ことばの学習は役に立たなければ意味がない」の記述が次に多かったように、メタ言語能力の「ためになる英語」に関しても、気づきがあった学生が数名いた。しかし、「国際理解の原点は互いにことばを学び合うことである」の項目は、Yesと回答した学生が3名減った結果となった。その理由は、文化や言語外のコミュニケーションに関する印象が強かったようである。今後の授業において、あらためてことばの大切さにも触れ、再考していきたい。

## 参考文献

池田理知子 (2006) 『現代コミュニケーション学』 有斐閣コンパクト



- 井村誠 (2002) 「コミュニケーション能力の育成と言語文化教育」『言語文化教育学の可能性を求めて』三省堂
- 江利川春雄 (2006) 「日本人はどんな英語を学んできたか」『英語教育』12月号 大修館書店
- (2009) 『英語教育のポリティクス：競争から協同へ』三友社出版
- 大谷泰照 (2007) 『日本人にとって英語とは何か』大修館書店
- 岡戸浩子 (2003) 『「グローバル化」時代の言語教育政策』くろしお出版
- 金子奨 (2008) 『学びがつむぐー「協働」が育む教室の絆』大月書店
- 荻谷剛彦 (2007) 『教育改革の幻想』ちくま新書
- 小池生夫・寺内正典・木下耕児・成田真澄 (2004) 『第二言語習得研究の現在』大修館書店
- 古賀範理 (2002) 「日本における外国語教育政策の現状と問題点」『久留米大学外国語教育研究所紀要』第9号
- 小寺茂明・吉田晴世 (2005) 『英語教育の基礎知識』大修館書店
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則 (2004) 『英語教育用語辞典』JACET SLA 研究会 (2005) 『第二言語習得研究』開拓社
- 高梨芳郎 (2009) 『データで読む英語教育の常識』研究社
- 津田幸男 (2005) 『言語・情報・文化の英語支配』明石書店
- 根岸恒雄 (2010) 「友と協力して学び、英語力を高める」『英語教育』7月号 大修館書店
- 東川直樹 (2006) 「日本人はどんな英語を学んできたか」『英語教育』12月号 大修館書店
- 三浦省五 (1993) 『英語の学習意欲』大修館書店
- 望月正道・相澤一美・投野由紀夫 (2003) 『英語語彙の指導マニュアル』大修館書店
- 森住衛 (1996) 「〈外国語教育＝英語教育〉でよいのか?」『英語教育』6月号 大修館書店
- (1998) 「英文法を見直す視点——〈学習指導要領〉の変遷と将来を見る」『英語教育』3月号 大修館書店
- (2000) 「特集：英語教育キーワード2000」『英語教育』9月号 大修館書店
- (2001) 「英語教育の根本を考える—時代を乗り越える不変なものとは何か—」『現代英語教育の言語文化学的諸相(齊藤栄二教授退官記念論文集)』三省堂
- (2004) 『単語の文化的意味』三省堂
- (2006a) 「今、言語文化教育は…Words, words, words」TALCE Newsletter No.9
- (2006b) ミニ講演 ‘What are the Ultimate Purposes of English Education?’

— Three Kinds of Education imposed on TEFL in Japan —  
TALCE  
Newsletter No.11

- 樋口昌彦・島谷浩 (2007) 『21世紀の英語科教育』 開隆堂
- 廣森友人 (2006) 『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』 多賀出版
- 三浦孝・中島洋一・池岡慎 (200) 『ヒューマンな授業がしたい!』 研究社
- 八島智子 (2004) 『外国語コミュニケーションの情意と動機』 関西大学出版部
- 山家保先生記念論集刊行委員会 (2005) 『英語教育の原点とは』 開拓社
- 吉島茂・大橋理恵 訳・編 (2004) 『外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 朝日新聞社
- 米山朝二 (1997) 『英語教育 実践から理論へ』 待柏社
- R.J. ウラッドコースキー著 新井邦次郎・鳥塚秀子・丹波洋子 (1991) 『やる気を引き出す授業』 田研出版
- 若林茂則・白畑知彦・坂内昌徳 (2006) 『第二言語習得研究入門』 新曜社
- Agota Scharle and Anita Szabo (2008) *Learner Autonomy*: Cambridge University Press
- Clement, R., Dornyei, Z., & Noels, K. (1994) Motivation, self-confidence, and group-cohesion in the foreign language classroom. *Language Learning*, 44 (3)
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985) *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2004) *Handbook of Self-Determination Research: The University of Rochester Press*
- Dornyei, Z., & Scott, M.L., (1997) Communication strategies in a second language: Definition and taxonomies. *Language Learning*, 27
- Dornyei, Z. (2001) *Teaching and researching motivation*. Harlow, UK: Pearson Education Limited
- Gardner, R. C., Tremblay, P. F., & Masgoret, A. M. (1997) Toward a full model of second language learning: An empirical investigation. *Modern Language Journal*, 81
- Noels, K. (2001) Learning Spanish as a second language: Learners' orientations and perceptions of their teachers' communication style. *Language Learning*, 51
- Oxford, R. L. (1999) Anxiety and the language learner: New insights. *Affect in language learning*. Cambridge: Cambridge University Press
- Stephen Andrews (2007) *Teacher Language Awareness*: Cambridge University Press

## Feedback

—あいづちは日本のストラテジー—

### Key words

feedback (あいづち) pardon (もう一度言って下さい) communication (コミュニケーション) magic word (魔法の言葉) repeat (を繰り返して言う) speaker (話し手) listener (聞き手) non-verbal cues (非言語的合図)

### Key sentences

Because Japanese people give so much feedback when they talk with each other, silence can sometimes mean that the listener does not understand. (p.10, l.10)

日本人はお互いに話をする時にとっても多くあいづちを打つので、沈黙は時々聞き手が理解していない事を意味する。

Japanese use more silence and non-verbal cues to communicate, while English speakers are forced to communicate clearly using words. (p.10, l.20)

日本人はコミュニケーションをとるのにより多くの沈黙や言葉によらない合図を使うが、一方英語母語話者は言葉を使ってはっきりとコミュニケーションをとる事が強いられている。

### Summary

Japanese people give so much feedback in their conversation. When the listener doesn't understand what the speaker say, English speakers are forced to communicate clearly using words, while Japanese use more silence and non-verbal cues. These two methods of getting someone to repeat in Japanese or English show a difference in culture.

日本人は会話の中でたくさんのあいづちを打つ。聞き手が話し手の言っている事が理解できない時、英語母語話者は言葉を使ってはっきりとコミュニケーションをとる事が強いられる。一方、日本人は沈黙や言葉によらない合図を使う。日本語又は英語で人に繰り返して言うてもらうためのこれらの2つの方法は異なる文化を表している。

## 日英‘あいづち’の比較

	日	英
頻度	2,9秒に1回	4,8秒に1回
タイミング	話の途中で打つ(あいので)	話の最後で打つ
種類	→資料	
考え方	賛同・賛成・同意見・否定 ⇒反応	賛同しているかは別として「話を続けて下さい」・「発話権が欲しい」・「自分が話したい」 ⇒対話

【出典】大浜るい子『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究』溪水社（2006年）

## 日英‘文化’の違い

日	英
ハイコンテキスト…相手の意図を察し合う能力が高い文化	ローコンテキスト…あくまで言語によりコミュニケーションを図ろうとする文化
→曖昧な表現を好む →質疑応答では直接的に答えず、聞き手の能力を期待する	→直接的で分かりやすい表現を好む →質疑応答では直接的に答える →言語に対して高い価値と積極的な姿勢を示す →寡黙である事を評価しない

【出典】 <http://www.pan-nations.co.jp/column> (2010, 5,2)

## 考察

（学生名）あいづちは文化によって捉え方が違う。自分たちの文化を基準に考えていると、異文化間コミュニケーションは成り立たず、逆に誤解を招いてしまう場合もある。お互いの文化を理解することができればより良いコミュニケーションにつながるだろう。

（学生名）このテーマのサブタイトルに「あいづちは日本のストラテジー」とあるが、私は日本のあいづちを戦略とは思えない。お互いを察し合える思いやりの心を持った日本の文化は素晴らしいと思うが、その文化に影響を受けたあいづちにおいてはもっと上手に使い分け、付き合っていくべきだ。

## 参考文献

大塚容子「日本語母語話者の英語使用場面におけるあいづち的表現」

大浜るい子『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究』溪水社（2006年）

水谷信子「あいづち論について」『日本語学』12巻7号，4-11（1988年）

水谷信子「話しことばと表現」筑摩書房

<http://www.pan-nations.co.jp/column> (2010,5,2)

学生レジュメ例 ②

## Rituals

—なぜ、英語に「いただきます」はないのか—

### Key Words

a conversation opener (話の切り出しの言葉), ritualistic language (習慣化したことば), mutual respect (お互いに対する敬意), group-oriented culture (集団志向の文化) unnatural (不自然な)

### Key Sentences

This mutual respect is very important in Japan's group-oriented culture.

(お互いに対する敬意は日本の集団志向において非常に重要である。)

On the other hand, for Japanese speakers, it is the process of saying the words that is most important.

(一方、日本語を話す人々にとって最も重要なのはその言葉を発するという行為である。)

By understanding each other's cultures better, we can avoid these mistakes.

(互いの文化をさらに理解することで、誤解を避けることができる。)

### Summary

日本語と英語では、敬意の表現において大きな違いが見られる。日本語には形式的な言い方が多いが、これらの言い方の背景には他者を思いやる気持ちが含まれている。一方で英語にはそのような言い方をする習慣はない。その分が表す意味をダイレクトに理解してよいのである。このこと背景として、日本文化には互いに尊敬することがとても重要視されており、英語では他者とコミュニケーションをとるために情報を得ることが重要視されていることがあげられそうだ。

●挨拶の比較

日本語	英語
お邪魔します	Thank you for inviting me.
お邪魔しました	I had a great time.
いってきます	I'm going. I'm leaving.
いってらっしゃい	Bye. Have a nice day.
ただいま	I'm home. I'm back.
おかえり	How was your work? Welcome home.
いただきます	Let's eat. Thank you for the meal.
ごちそうさまでした	I'm finished. I'm full. That was a great dinner.

これってなんて意味？～直訳できないシリーズ～

「お先にどうぞ」→「 After you! Please go first! 」

「Sweet dreams.」→「 おやすみなさい 」

「It's on me.」→「 私のおごりよ！ 」

「I'm on pins and needles.」 →「 やきもきするわ！ 不安だわ！ 」

「I've got a lump in my throat!」→「 (感激や悲しみで) 胸がいっぱいになる 」

「Leave it to me.」→「 私に任せて！ 」

考察

日本語の表現をダイレクトに英語に変換することはできない。なぜなら、それは英語圏では日本のような挨拶をする習慣がないからである。

そこで日本語から英語に直す際には単語の意味を訳すだけでなく、その言葉によって何が伝わるのかを理解しなければならない。相手の文化を知らないとテキストにもあったように、誤解が招かれる。私たちは異文化を理解し、異文化間の知識不足を埋める必要があるのではないだろうか。

参考文献

伊佐雅子『多文化社会と異文化コミュニケーション』（2007年）三修社

小松達也『訳せそうで訳せない日本語』（2008年）ソフトバンク新書

長尾和夫&アンディ・バーガー『覚えたらすぐに使いたくなる英語』（2006年）すばる舎

長谷川潔『日本語からみた英語』（1976年）サイマル出版社  
 All About <http://allabout.co.jp>

学生の評価例

資料 2

プレゼンテーション評価リスト

氏名 ( \_\_\_\_\_ )

発表テーマ Unit 1

発表者 ( \_\_\_\_\_ )

	10	8	6	5	3	1
1. 声の調子や話す速度は聞きやすかったか。	10	8	6	5	3	1
2. レジメと資料の組み合わせが適切であったか	10	8	6	5	3	1
3. 話の意図・強調することが伝わったか。	10	8	6	5	3	1
4. 興味や理解を促進する工夫があったか。	10	8	7	5	3	1
5. 熱意が感じられたか。	10	8	7	5	3	1

合計

34

点

(質問)

日本のような縦社会はなぜ生まれたのか。日本人の性格的なもの以外に何か理由はあるのか。

(良かった点)

・聞いている人に質問を投げかけたり、プリントの問題を解かせたりしていて、あきらめない努力をしていたと思う。  
 ・最初のグループということと緊張していたと思うけど、大体しっかりしていた。

(改善すべき点)

・レジメの構成の仕方を直すべき。  
 ・もう少し話す内容を決めておく必要があったと思う。  
 ・全体的に浅く感じた。

